

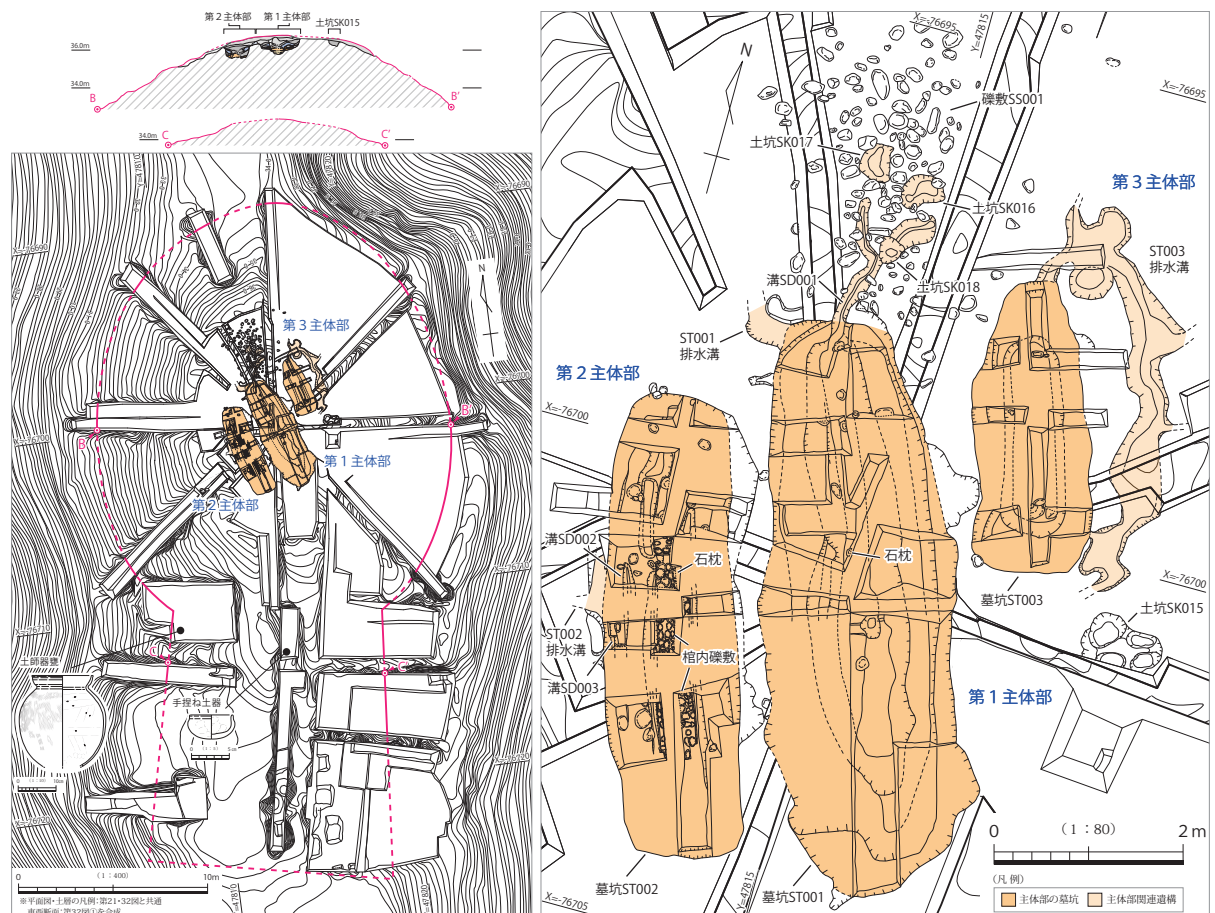
第2節 出雲平野周辺における古墳時代前半期の埋葬施設と棺内磔敷

1 はじめに

出雲平野の西南部にあたる神西湖南岸地域は、古墳時代前半期に古墳の築造が盛んに行われた地域である。これまで、豊富な副葬品や棺内磔敷が確認された古墳時代前期末頃の山地古墳（出雲市神西沖町）や、当時出雲地方で最大級の規模を誇る古墳時代中期中葉から後葉頃の前方後円墳である北光寺古墳（出雲市東神西町）の存在が知られていた。

こうした状況のなか、常楽寺柿木田1号墳の発掘調査が行われ、古墳の墳丘構造や埋葬施設の様相を把握することができた。具体的には、常楽寺柿木田1号墳は古墳時代前期末から中期初頭に築かれた全長最大で約35mの前方後円墳であり、後円部に確認された3つの主体部のうち、第2主体部で棺内に磔敷を備えた埋葬施設を持つことが確認され（第71図）、出雲平野周辺における古墳時代前半期の様相を紐解く重要な位置づけにあることが明らかになった。

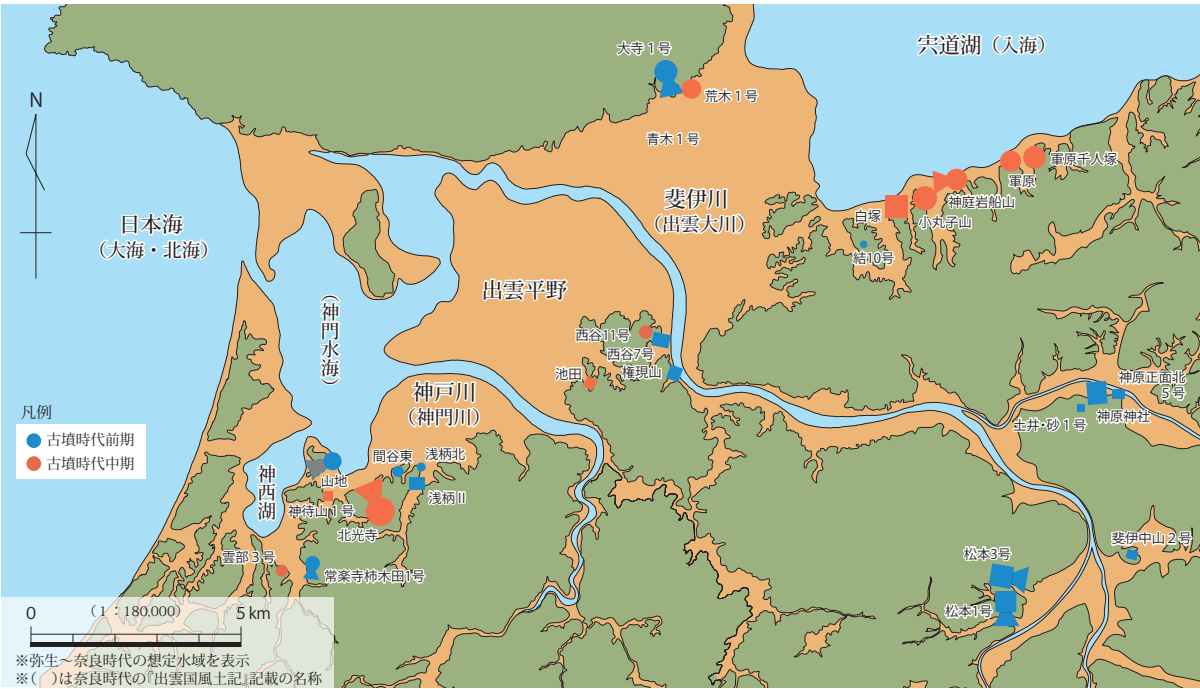
本稿では、常楽寺柿木田1号墳における主体部の内容確認調査の成果を踏まえ、出雲平野周辺における古墳時代前半期の埋葬施設や棺内磔敷の様相に注目し、常楽寺柿木田1号墳の歴史的な位置づけについて検討を行いたい。



第71図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘全体図（左）と主体部全体図（右）

2 神西湖南岸地域の古墳時代前半期の埋葬施設

古墳時代前半期の出雲平野周辺は、古墳時代前期中葉頃から複数の古墳が神西湖南岸地域に展開する状況となっている（第72図）。まずは神西湖南岸地域において調査が行われた主要な古墳を中心に、この地域の埋葬施設や棺内礫敷の様相を整理する。



時期	土器編年		集成 編年	中四国 編年 (前期)	神西湖南岸周辺	出雲平野中央部周辺	宍道湖西岸周辺	宍道湖南岸周辺	斐伊川流域周辺
	畿内	出雲							
古墳時代前期	前期初頭	布留0	(草田6) 大木 小谷1	I					土井・砂 1号 2号 3号 4号 5号 6号 10 9×8 9×8 9 13×8 11×10 神原正面北 4号 5号 7×7 17×12
	前期前葉	布留1古	小谷2			権現山 ■ 19×17			神原神社 ■ 30×26 松本3号 ■ 52
	前期中葉	布留1新	小谷3古	II	浅柄II ■ 20×16				松本1号 ■ 50
	前期後葉	布留2古	小谷3新	III	浅柄北 ● 12	西谷7号 ■ 23×18	大寺1号 ■ 52		斐伊中山2号 ■ 15×12
	前期末葉	布留2新	小谷4	IV	山地 ● 24 (45) 常楽寺 柿木田1号 ● 35 間谷東 ● 15 神待山1号 ■ 12×12	西谷21号 ■ 10×8 西谷18号 ■ 9×9 西谷11号 ● 18		結10号 ● 10 軍原 ● 30	
古墳時代中期	中期初頭	布留3 布留4古 TG232他	大東 (大角山)	V					
	中期前葉	TK216		VI	雲部3号 ● 16	西谷16号 ● 11	荒木1号 ● 26		
	中期中葉	ON46	夫敷中層		北光寺 ■ 64	池田 ■ 15		軍原千人塚 ● 30 小丸子山 ● 32	
	中期後葉	TK208	出雲1古					白塚 ■ 30×30 神庭岩船山 ● 49	
	中期末葉	TK23 TK47	出雲1中 出雲1新			西谷15号 ■ 10×10		結11号 ■ 14×11	

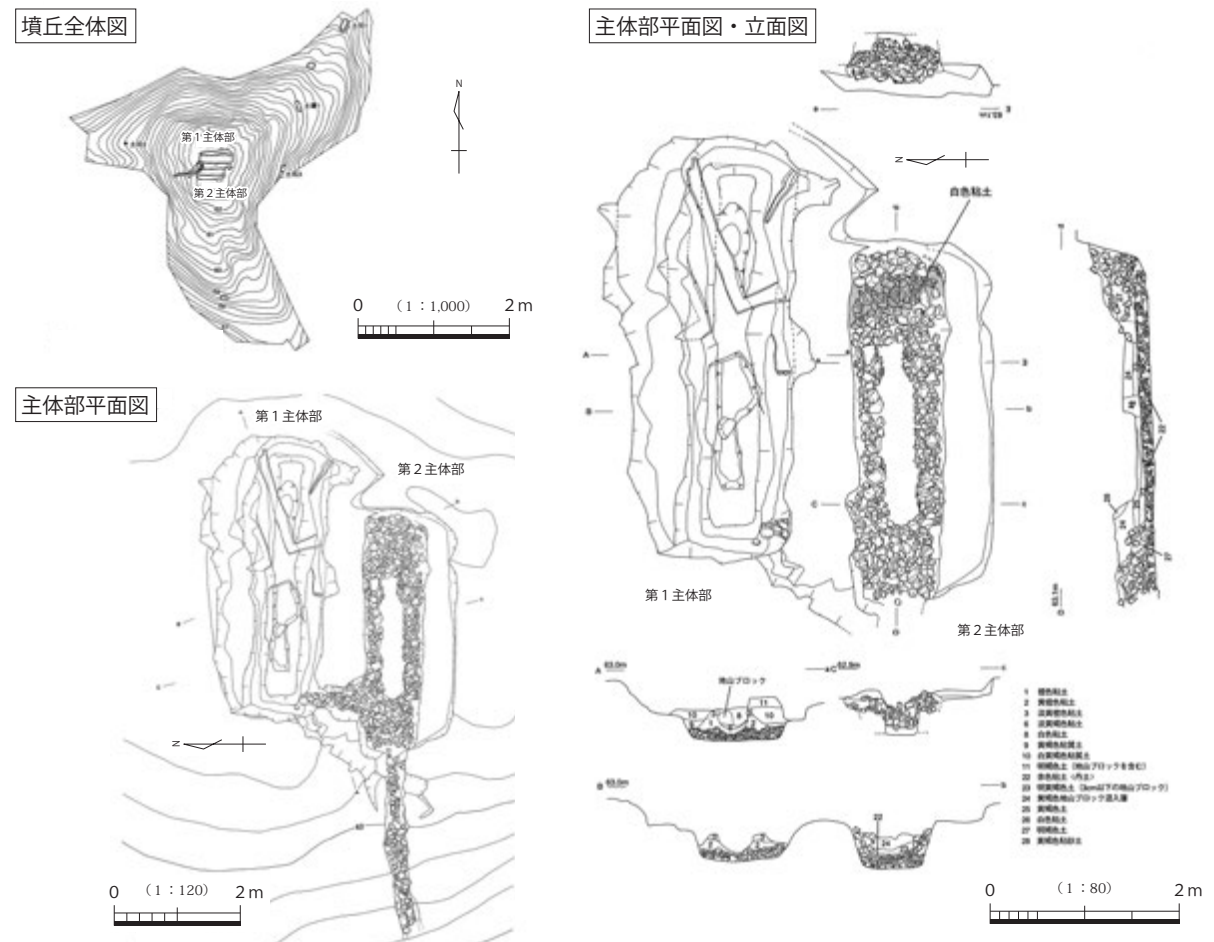
第 72 図 出雲平野周辺の古墳時代前半期における古墳分布と変遷

(1) 浅柄Ⅱ古墳(出雲市知井宮町、古墳時代前期中葉頃)

古墳時代前半期の早い段階では、前期中葉頃に築造された可能性のある浅柄Ⅱ古墳が神西湖南岸地域の東西に連なる丘陵東側の尾根上に存在する⁽¹⁾(第73図左上)。発掘調査によって墳丘は地山の地形を利用した削り出しで最大で20×16m前後の方墳と想定されており(川原編2005)、墳頂部には墳丘主軸と直交して主軸方位が揃った2つの主体部を設けている状況が確認された(第73図左下)。

主体部に伴う副葬品は第1主体部で鉄剣が出土したのみであったが、主体部の埋葬施設の構造は、第1主体部に粘土槨と割竹形木棺が採用され、第2主体部は礫槨と組合式木棺が用いられるなど、槨構造の異なる埋葬施設が並行して造られている点が注目される。また両主体部の排水溝は連結して構築されており、第1主体部が築かれた後に第2主体部が設けられたと想定されているが、両主体部の時期差はそれほどなく、墳丘上に計画性を持って主体部を構築したことが分かる。なお、第2主体部から墳丘西側斜面に向かって排水溝が設けられ、内部には礫が充填されている。

また、第1主体部と第2主体部は、墓坑床面全体に2～10cm程度の扁平な礫が厚み6～15cm程度で充填されている(第73図右)。特に第1主体部では割竹形木棺の設置や、排水機能を持たせるために中央部分をU字状に窪めて丁寧に構築されていた状況が確認されている。これらは埋葬施設全体の下部構造として墓坑床面に敷設された礫床であり、常楽寺柿木田1号墳で認められた木棺の底板に代替される棺内の礫敷とは性格が異なる⁽²⁾。

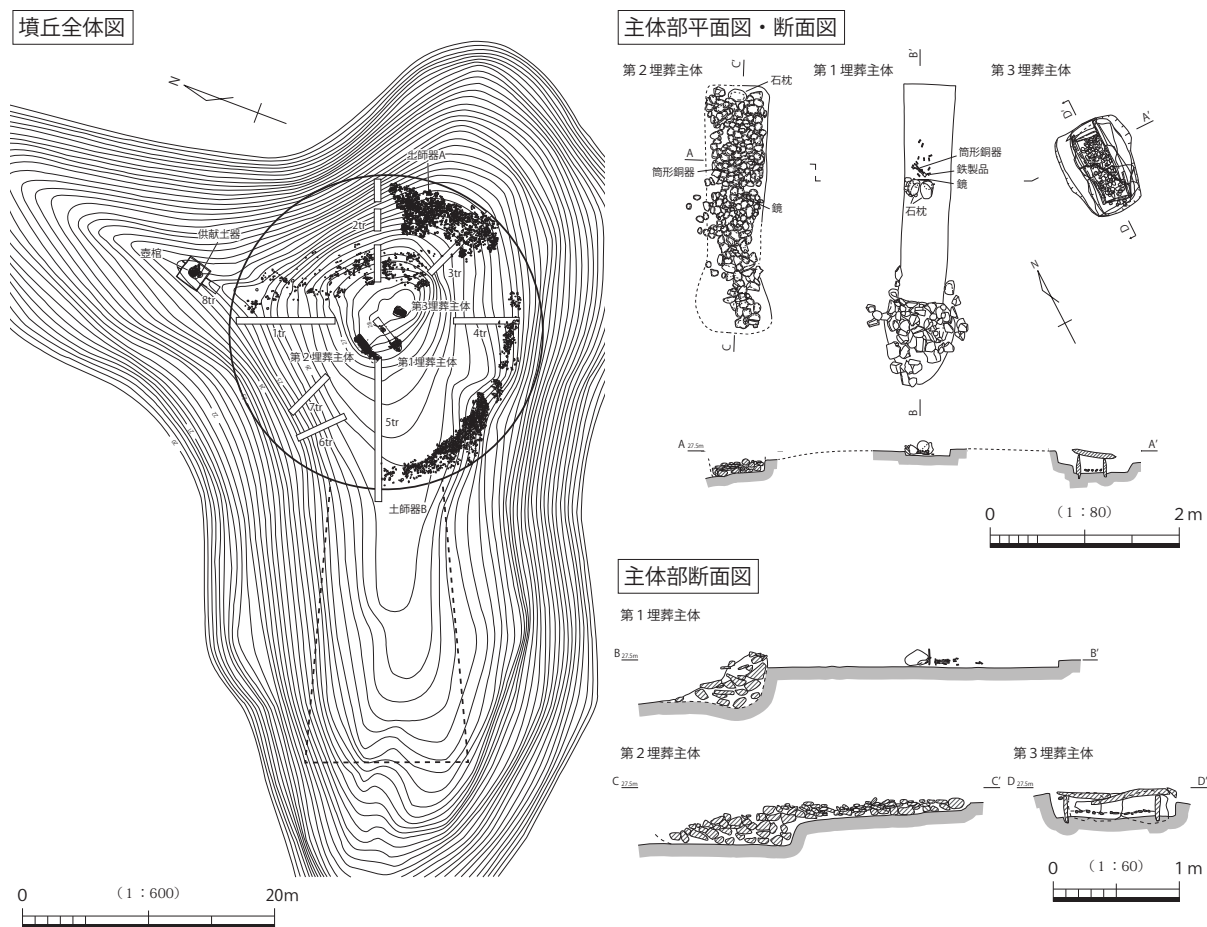


第73図 浅柄Ⅱ古墳の墳丘と主体部

(2) 山地古墳（出雲市神西沖町、古墳時代前期末頃）

当時の神西湖の想定水域に近接する丘陵上に築かれた山地古墳は、古墳時代前期末頃に造られたと考えられる古墳であり、丘陵地形を利用した地山の削り出しと盛土によって墳丘が形成されている。発掘調査の結果、24mの円墳であると報告されているが（川上編 1986）、円墳から西側に伸びる平坦面を前方部として捉えることも可能であり（幡中 2023）、その場合は最大で約 45m の前方後円墳の可能性を持つ（第 74 図左）。墳丘上には 3 つの主体部が構築されており、第 1・2 主体部では豊富な副葬品が認められ、仿製鏡や管玉のほか、全国的にも事例が限られる筒形銅器が出土した（第 74 図右上）。山地古墳の被葬者はこの地域一帯を束ねる盟主的な存在であったと推察され、古墳の立地からも当時の神西湖を舞台とした水上交通において重要な役割を担っていた可能性が高い。

主体部の埋葬施設としては、第 1・2 埋葬主体が組合式木棺、第 3 埋葬主体は板石で構成される箱式石棺が採用されており、第 1・2 埋葬主体の南側には地山を掘り窪めて礫を充填させた排水施設を持つ（第 74 図右下）。注目されるのは、第 2・3 埋葬主体で棺内の底面にそれぞれ特徴の異なる礫敷が認められる点である。第 3 埋葬主体の礫敷は 1～5 cm 程度の円礫を用いて一段で構成され、礫敷下の墓坑底面上には棺台としての敷土が認められる。一方、第 2 埋葬主体では 5～10 cm 大の扁平な円礫が三～四段程度重なりを持って概ね 10 cm 前後の厚みで構築されており、礫敷の構造にやや違いが生じている。第 2 埋葬主体の礫敷は、中央付近に木棺の仕切り板痕跡が認められる状況（幡中



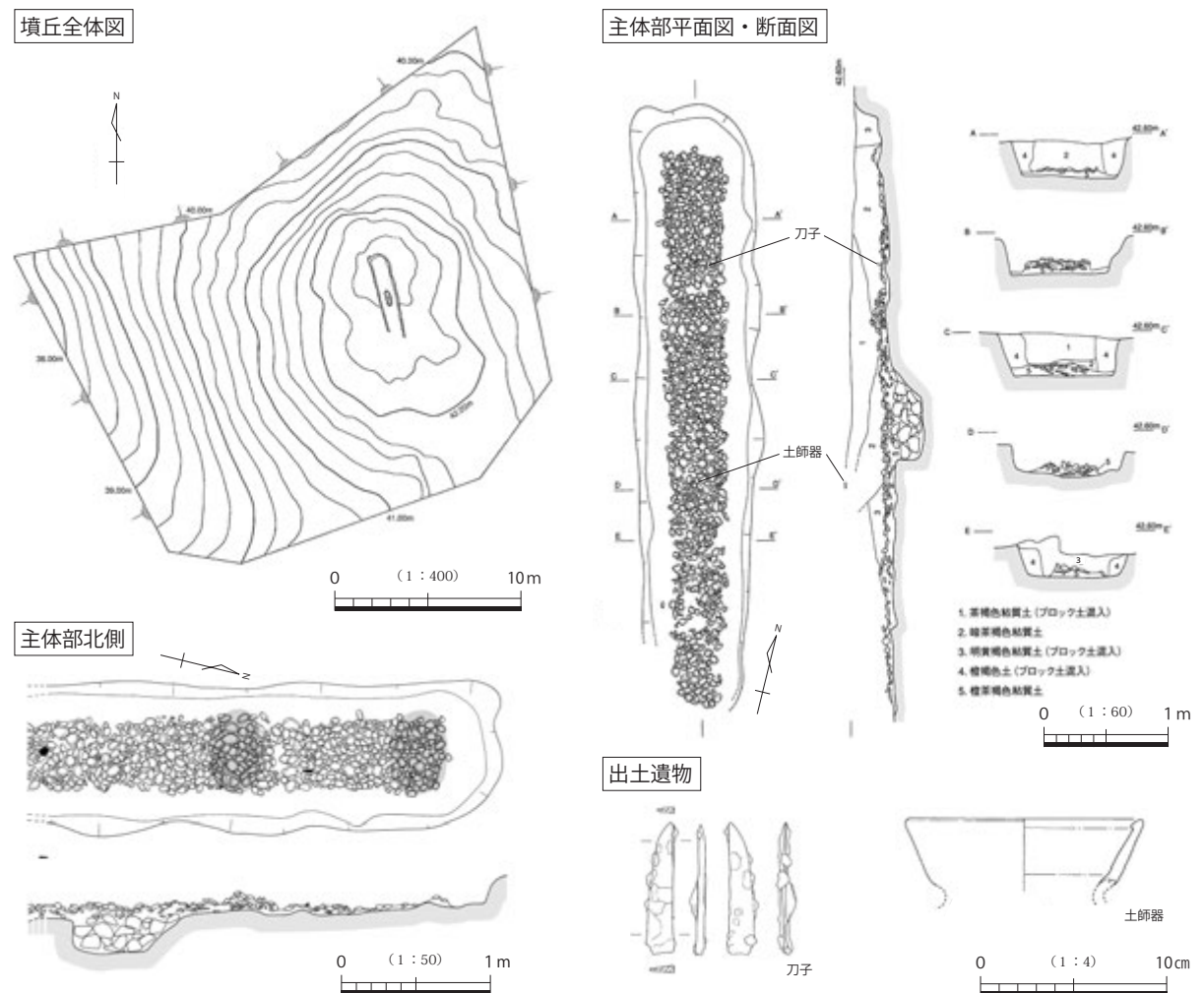
第 74 図 山地古墳の墳丘と主体部

2023)を勘案すれば、礫敷が底板の代替として敷設されたと考えられ、また多段に積み重ねられた礫の構築状況や、墓坑床面に勾配が設けられて主体部南側の排水施設と連結する構造を考慮すると、埋葬施設の排水機能も同時に担っていた可能性が想定される。

(3) 間谷東古墳(出雲市知井宮町、古墳時代前期末～中期初頭頃)

間谷東古墳は浅柄Ⅱ古墳や浅柄北古墳が立地する丘陵上に築かれ、周辺には複数の古墳が築かれている。墳丘規模は概ね 15m 程度の円墳であることが調査成果のなかで報告されており(景山・曾田編 2008)、墳頂部には主体部が1つ確認されている(第75図左上)。主体部の調査では内部から刀子が出土したほか、主体部上の盛土から布留系の土師器甕が出土しており(第75図右下)、常楽寺柿木田1号墳と同時期頃の古墳時代前期末から中期初頭頃に築造されたと推定できる。

主体部の埋葬施設には5～10cm程度の扁平な円礫を用いて一段または二段程度で構成された礫敷が展開する(第75図左下・右上)。内法長が3m以上で棺内底面に礫敷を持ち、棺内が2区画以上に区切られる「奥才型木棺」の要件(赤澤 2002)を満たす。墓坑底面には橙茶褐色粘質土が敷設されてその上に礫敷が構築されることから、橙茶褐色粘質土は礫敷台として機能したと考えられる。また礫敷は木棺の仕切り板で3つの空間に区切られ、北側区画(長さ約1.1m)と中央区画(長さ約2.0m)



第75図 間谷東古墳の墳丘と主体部・出土遺物

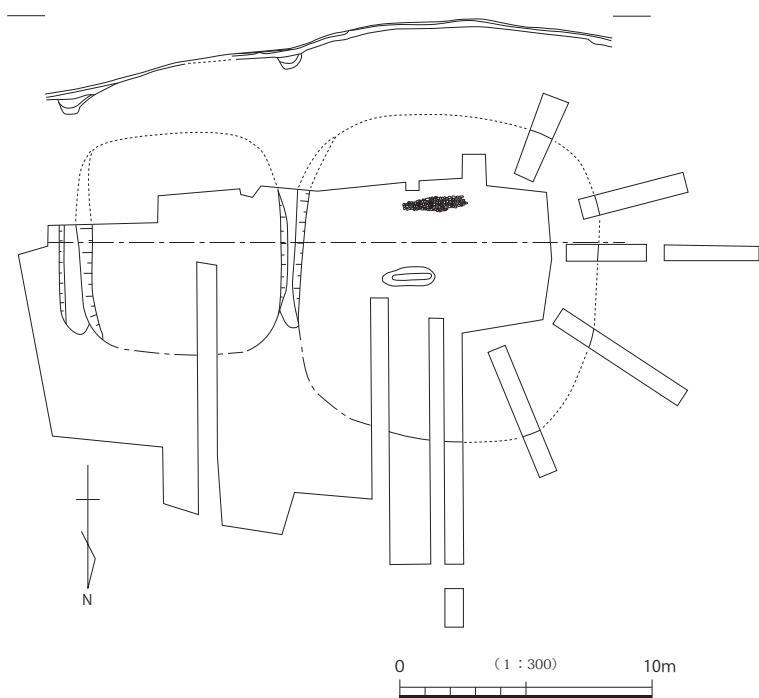
の北端は礫が厚く積み上げられて枕状に盛り上がる。特に中央区画の盛り上がり付近の礫は周辺のものよりも一回り大きく、常楽寺柿木田1号墳の第2主体部で確認した状況に照らし合わせれば、石枕として機能した可能性が高いと考えられる。なお墓坑床面の中央付近では、礫敷の石材と明らかに区別される拳大の垂角礫を充填した墓坑内小土坑を設けている。構築状況から明確な埋葬痕跡は認められず、また排水機能も期待できないことから、埋葬施設や排水施設とは別の機能を持つ何らかの祭祀関連の施設であったと想定されている。

(4) 神待山1号墳(出雲市東神西町、古墳時代中期前半頃)

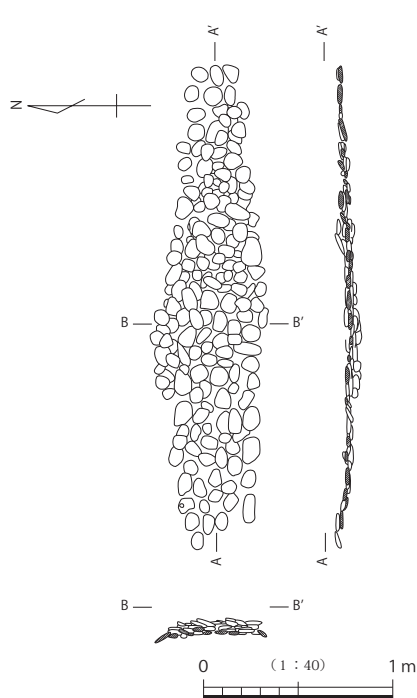
神待山古墳群は山地古墳が立地する丘陵の南側にある独立した丘陵上に築かれており、円墳が2基、方墳が2基で構成されている(出雲市教育委員会編1993)。このうち神待山1号墳は一辺約12mの方墳であり、墳頂部南側の主体部に礫敷が築かれている状況(第76図)が示されている(川原1992)。その他の遺構に関する詳細な内容は不明であるが、墳頂部中央付近には長円形で約2.1m程度の土坑があり、中央部に埋土が半円形に堆積するほか、その下には木炭が充填されて床面に焼土が認められる状況が報告されている⁽³⁾。

主体部の礫敷は、10cm前後の扁平な円礫で構成されており、断面状況を見ると概ね一段あるいは二段程度で円礫が敷き詰められている状況を把握できる。また礫敷中央からやや東側には礫を積み上げて枕状の高まりを設けている箇所が確認でき、常楽寺柿木田1号墳や間谷東古墳と同様に石枕として構築された可能性がある。副葬品は出土しておらず、報告では古墳時代中期頃の築造と推定されている。なお、礫敷の敷設状況から判断すれば、間谷東古墳や常楽寺柿木田1号墳と類似しており、中期のなかでも両古墳と比較的近い時期に造られたと考えられる。

墳丘全体図



主体部平面図・断面図



第76図 神待山1号墳の墳丘と主体部

(5) 周辺の古墳（古墳時代前～中期）

これまで神西湖南岸地域の埋葬施設に礫床や棺内礫敷を用いた古墳を取り上げて詳しく検討してきたが、同地域にはその他にも多くの古墳が存在しており、古墳時代前半期において埋葬施設がある程度把握できる古墳の様相を簡潔に整理しておきたい。

浅柄古墳（出雲市知井宮町，古墳時代前期頃）

浅柄北古墳の南に位置する丘陵上には浅柄古墳が存在しており、古墳の埋葬施設に箱式石棺が採用されている（大谷・池田 1972）。箱式石棺は複数の頁岩の板石を組み合わせで造られ、石棺内には 20 ～ 30 代と考えられる女性の人骨が確認されている。副葬品などは確認されていない。

石棺床面は 20 ～ 30cm 大の小石板が全面的に敷き詰められている状況が報告され、石棺の底板が設置されていたと考えられる。詳細な時期比定は難しいが、報告された箱式石棺の構築状況は山地古墳の第3埋葬主体の様相と類似しており、古墳時代前期頃の所産と考えておきたい。

浅柄北古墳（出雲市知井宮町，古墳時代前期後葉頃）

浅柄北古墳は、浅柄Ⅱ古墳から北に向かった丘陵東端部の尾根上に築かれている。墳頂部は削平を受けており明瞭ではないが、古墳の立地から丘陵の地形を活かした地山の削り出しで墳丘が構築されたと推察される。発掘調査の結果、浅柄北古墳は最大で 12m 程度の墳丘規模を持つと想定され、墳丘上からは土器棺が 2 基確認された⁽⁴⁾（今岡編 2009）。墳頂部が削平されており、墳丘中央の主体部は確認されていないが、墳丘東側斜面には石棺に伴うと考えられる板石が認められ、石棺の存在が想定されていた。よって、主体部の埋葬施設は箱式石棺と土器棺が設けられたと考えられる⁽⁵⁾。

浜井場 2 号墳（出雲市東神西町，古墳時代中期頃）

浜井場古墳群は、間谷東古墳の東側に位置して丘陵先端部に築かれる。古墳群を構成する 1・2 号墳のうち、2 号墳の発掘調査が行われた。調査では、一辺が約 12m 程度の方墳であり、墳丘は地山の削り出しで成形され、墳頂部に二段掘りの墓坑を持つ主体部が確認された（岸編 2005）。主体部からは直刀、刀子、石鏃などの鉄製品が出土しており、築造時期は古墳時代中期頃と想定されている。

その他に注目されるのは、墓坑底面に拳大から 20cm 程度の礫が充填されている状況であり、埋葬施設として木棺が据えられたと考えられているが、浅柄Ⅱ古墳の埋葬施設の礫床や常楽寺柿木田 1 号墳などの棺内の礫敷とは様相が異なる。主体部に排水溝は確認されておらず、十分な排水機能を担っていたとは想定しにくい。被葬者の埋葬などに伴う葬送儀礼に関連した遺構の可能性はある。

丁之内古墳（出雲市東神西町，古墳時代中期頃）

丁之内古墳は、浜井場古墳群よりもさらに西側の丘陵先端部にあり、当時の神西湖の想定水域に近接する位置にある。これまでに発掘調査が行われ、墳丘は一辺約 10m 程度の方墳と想定されたほか、木棺が据えられたと考えられる主体部が墳頂部に 1 つ確認されている（川上編 1981）。主体部からは鉄剣と鉄鏃束が出土しており、古墳時代中期頃の築造として推定されている。

なお、丁之内古墳の西側には古垣内遺跡（出雲市東神西町）が存在しており、墓坑と副葬品の鉄鉈および砥石が確認されている。墓坑には木棺を固定した深さ 5cm 程度の掘り込みが認められた（川上編 1981）。丁之内古墳との類似性から古墳時代中期頃のものと考えられている（岸編 2005）。

柿木田古墳（出雲市湖陵町，古墳時代前～中期頃）

柿木田古墳は大正時代の開墾によって発見された古墳であり，常楽寺川の西に位置して神西湖に注ぐ姉谷川の右岸にある丘陵上に立地する。古墳は直径が約 11m の円墳で，直刀が出土したとされるが詳細は不明である。また埋葬施設は箱式石棺で，床面には礫敷あるいは石敷が存在したとされている（野坂編 2000，西尾・野坂 2000）。現段階では推測の域を出ないが，山地古墳の第 3 埋葬主体のように底板の代用として礫敷が展開していた可能性が考えられる。

雲部 3 号墳（出雲市湖陵町，古墳時代中期前半）

雲部古墳群は神西湖南側の丘陵上に築かれた古墳群で，1 号墳は直径約 6 m の円墳，2 号墳は方墳，3 号墳は最大で約 14m の楕円形墳，4 号墳は墳形が不明であるが，一辺 10m の規模を持つ古墳として報告されている（野坂編 2000，西尾・野坂 2000）。古墳時代中期前半頃の築造と考えられる 3 号墳は埋葬施設に凝灰岩製の舟形石棺が採用され，棺の奥には造り付けの枕が彫り込まれていた。

3 出雲平野周辺の埋葬施設と階層構造

これまで神西湖南岸地域の主要な古墳における埋葬施設の特徴を整理してきた。そのなかで，礫床や棺内の礫敷を持つ主体部のほか，排水溝などの関連施設についても礫が主体的に用いられる様子が確認された。そのなかで，常楽寺柿木田 1 号墳や山地古墳では墳頂部に複数の主体部を設けているが，棺内礫敷が必ずしも社会的に優位な主体部に伴わない可能性が考えられた（第 3 章第 4 節）。よって，これまでに確認してきた神西湖南岸地域の様相を踏まえ，古墳時代前半期の出雲平野周辺における埋葬施設の様相を把握しつつ，そこから見えてくる主体部の階層構造の変遷を検討する。

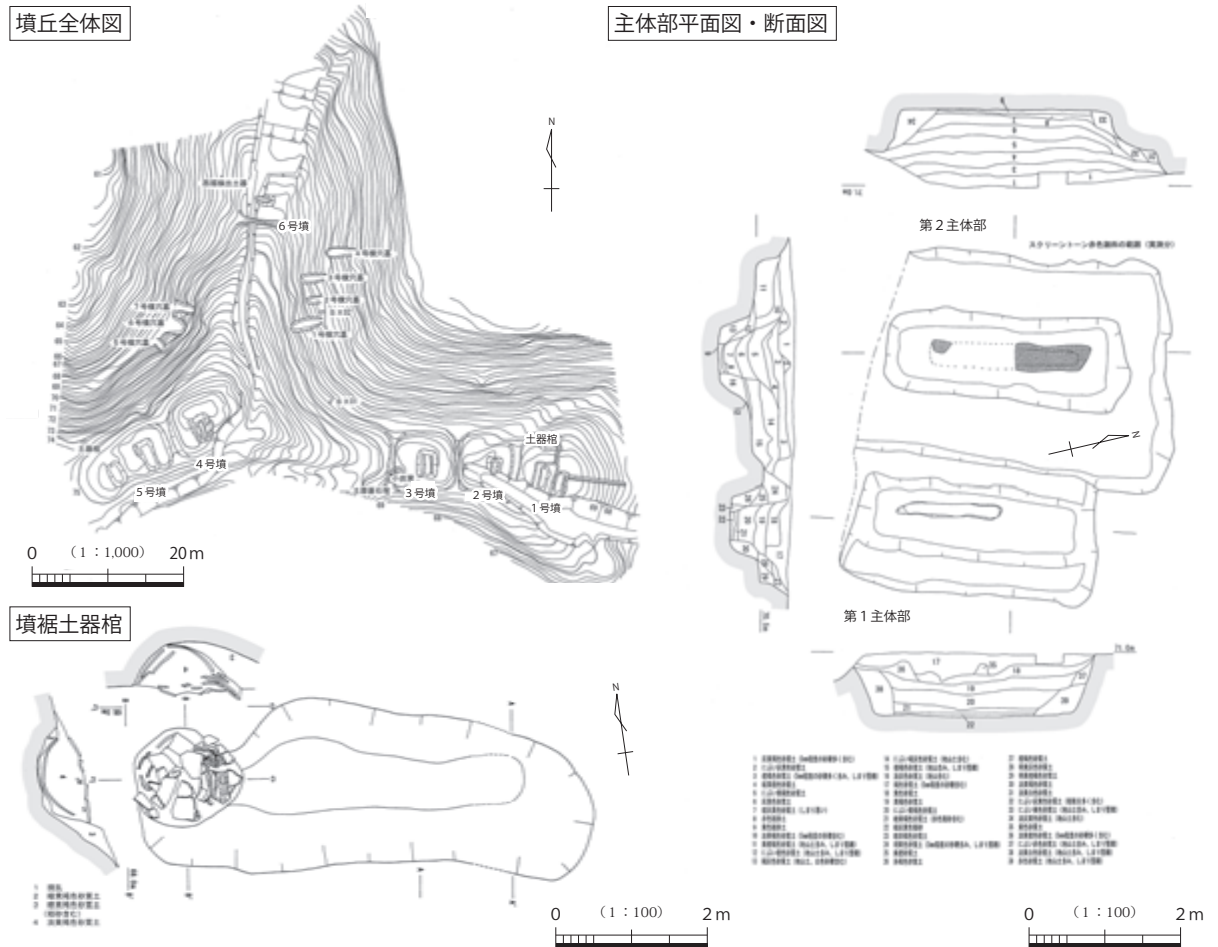
（1）古墳時代前期初頭～前葉の埋葬施設

土井・砂 1 号墳（第 77 図）

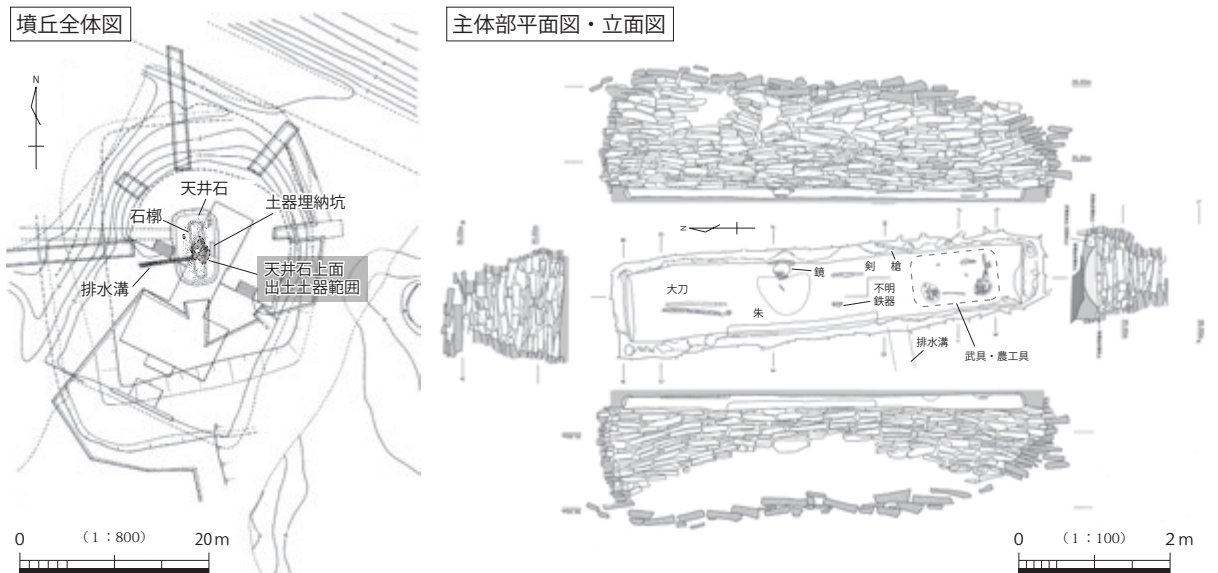
古墳時代前期初頭の埋葬施設の様相は，斐伊川支流の赤川南岸の丘陵上に立地する土井・砂古墳群（雲南市加茂町）で確認できる。土井・砂古墳群は 6 基の方墳で構成され，このうち 1 号墳と 5 号墳で複数の埋葬施設が設けられている（田原・仁木ほか編 2001）。ここで 1 号墳に注目すると，墳頂部中央には墳丘主軸に直交するように第 1・2 主体部が並列して配置されている。第 1 主体部は組合式木棺，第 2 主体部は刳拔式木棺で内部から破鏡が出土しており，また第 2 主体部の棺内底面には赤色顔料が塗布されていた。第 2 主体部は第 1 主体部を一部崩して構築され，墓坑の規模は第 2 主体部の方が大きいものの，想定される棺の規模にはそれほど差がなく，両主体部が墳頂部中央に配置されている。そのため，副葬品から判断して第 2 主体部が社会的に優位な位置を占めていたと想定できる。なお，同様の傾向は 5 号墳の主体部でも確認することができ，墳丘主軸に直交して配置された第 1・2 主体部には位置関係の社会的な優劣は認められない。

神原神社古墳（第 78 図）

古墳時代前期前葉に単数の主体部を墳丘上に構築する事例として 斐伊川支流の赤川南岸沿いの丘陵上に築かれた神原神社古墳（雲南市加茂町）が注目される。神原神社古墳の主体部は墳丘主軸に沿って墳頂部に配置される。埋葬施設は粘土槨を伴う竪穴式石槨が認められ，その上に割竹形木棺を設置



第77図 土井・砂1号墳の墳丘と主体部



第78図 神原神社古墳の墳丘と主体部

する構造となる（蓮岡ほか編 2002）。また豊富な副葬品を持ち、鉄鍬や素環頭刀などの武具、鉄斧や鉄鉈、鉄針などの農工具が確認されているほか、「景初三年」銘三角縁神獣鏡が出土しており、近畿地方と繋がりを持つ有力な首長墓であると考えられる。また石槨の西壁面には礫を充填した排水溝が墳丘斜面側に向かって設けられている。

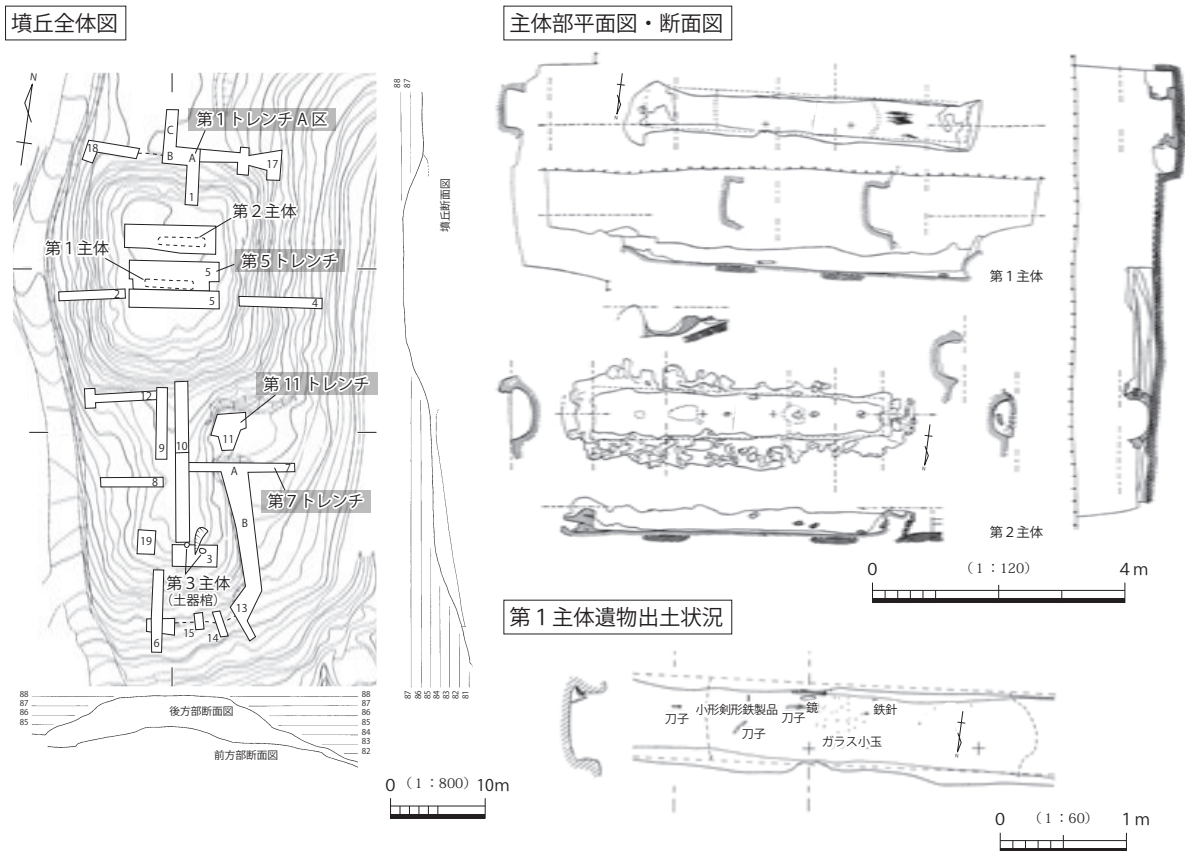
(2) 古墳時代前期中葉の埋葬施設

松本1号墳 (第79図)

古墳時代前期中葉頃の埋葬施設の様相は、斐伊川水系の三刀屋川左岸の丘陵尾根上に立地する前方後方墳の松本1号墳(雲南市三刀屋町)から把握でき、主体部は後円部上に2つ、前方部には1つ確認されている(山本編 1965, 出雲考古学会編 1991)。後円部上の第1・2主体は、墳丘の主軸に直交して後円部上に並列する形で配置され、第1・2主体は粘土槨を持ち、第1主体は組合式木棺、第2主体は割竹形木棺が採用される。副葬品は、第1主体から獣帯鏡が出土したほか、小形剣形鉄製品や刀子・鉄針のほか、ガラス小玉が豊富に出土しており、鉄剣や鉄製品および管玉が1点ずつしか確認されていない第2主体の副葬品を凌駕する。また主体部の規模に大きな差はなく、副葬品から第1主体に社会的な優位性を認めることができる。なお、前方部の第3主体は土器棺であり、内部に副葬品などは認められず、後円部上に築かれた第1・2主体に対して社会的な優位性は低いと考えられる。

浅柄Ⅱ古墳 (第73図)

古墳時代前期中葉頃の埋葬施設を持つ浅柄Ⅱ古墳は、第1主体部が粘土槨と礫床、第2主体部が礫槨と礫床で構成されており、また両主体部の排水溝を連結させて主体部外側に続く排水溝へと繋げ、それらの内部には礫を充填するなど、神原神社古墳の排水溝と構造が類似しており、かなり綿密に造り込まれた印象を受ける。なお、第1主体部と第2主体部の規模は、第1主体部が若干大形であるものの差はそこまで拡大せず、墳丘の中心に第1・2主体部が墳丘主軸に直交して並列に配置される。



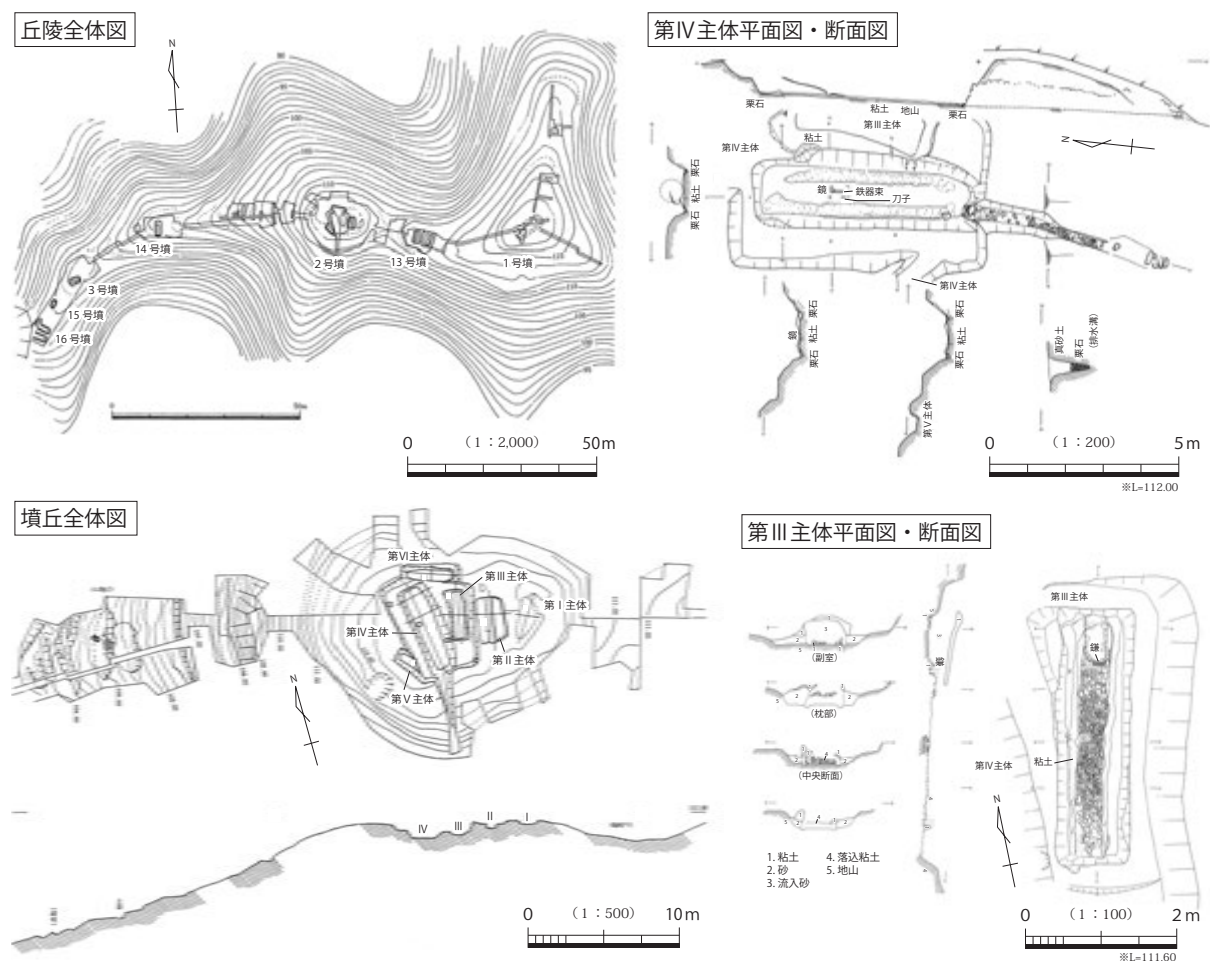
第79図 松本1号墳の墳丘と主体部

また、主体部配置では明確な差異は認められないが、副葬品は第1主体部から鉄剣が1点出土しており、埋葬施設は粘土槨と磔敷を伴う割竹形木棺が第1主体部に採用されたことも踏まえると、第2主体部よりも第1主体部の方が社会的な優位性は高かったと推測される。

(3) 古墳時代前期後葉～末葉頃の埋葬施設

斐伊中山2号墳（第80図）

古墳時代前期後葉の埋葬施設の様相は、斐伊中山2号墳（雲南市木次町）から看取できる。斐伊中山2号墳は、斐伊川流域付近の丘陵尾根上に形成された斐伊中山古墳群の一部をなす方墳であり（第80図）、6つの主体部を持ち、そのうち第Ⅲ～Ⅵ主体は重複しつつも、一体的な墓坑内部に構築されている（杉原・藤原編1993）。排水溝の内部は磔が充填され、浅柄Ⅱ古墳の主体部に伴う排水溝と構造が類似する。なお、第Ⅳ主体の埋葬施設は粘土槨を持つ割竹形木棺で、最も規模が大きい。第Ⅲ主体の埋葬施設は粘土槨と棺内に磔敷を伴う奥才型木棺であり、第Ⅳ主体に次ぐ規模を持つ。その他の主体部は組合式木棺の埋葬施設であったと考えられる。また主体部の配置は、墳丘の中心に第Ⅲ・Ⅳ主体が設けられるが、他の主体部は墳丘主軸とは連動せずに第Ⅲ・Ⅳ主体の周辺を囲うように構築される。また第Ⅳ主体の副葬品は鳥文鏡や刀子、鉄鉈や鉄製品が認められるが、第Ⅲ主体は鉄鎌のみが出土した。これらを総合すると、副葬品のほかに主体部の規模や配置にも社会的な優劣が生じており、



第80図 斐伊中山2号墳の墳丘と主体部

第Ⅳ主体が最も社会的地位が高く、礫敷を持つ奥才型木棺の第Ⅲ主体部はそれに次ぐ位置づけにあったと考えられる。なお、出雲平野周辺では、斐伊中山2号墳の第Ⅲ主体の奥才型木棺が現在のところ棺内礫敷が出現する初期段階の埋葬施設である。

山地古墳（第74図）

古墳時代前期末頃に比定できる山地古墳は3つの主体部が墳頂部に設けられ、第1埋葬主体および第2埋葬主体は組合式木棺であり、第2埋葬主体は棺内に礫敷を備える。第3埋葬主体は棺内に礫敷を伴う箱式石棺が構築されている。第1・2埋葬主体では排水溝を持たないが、地山を掘り窪めて礫を充填した排水施設を持つ。また墳丘の中心には第1埋葬主体が設けられ、その両脇に第2・3主体部が構築されている。主体部の規模は第1埋葬主体が最も大きく、第2埋葬主体がそれに続き、第3埋葬主体は最も規模が小さい。また副葬品は第1・2埋葬主体で認められ、特に第1埋葬主体でその種類が豊富であったことを前項で確認した。こうした点から、副葬品の種類や数量、主体部の規模や配置による階層構造が展開していたと考えられ、第1埋葬主体は礫敷を持つ第2・3埋葬主体よりも社会的な優位性が高かった可能性がある（幡中 2023）。

（4）古墳時代前期末～中期初頭頃の埋葬施設

間谷東古墳（第75図）

間谷東古墳は墳丘上に単独で主体部が設けられており、主体部の内法長が3m以上で棺内に礫敷を伴い、2区画以上の空間を持つ奥才型木棺が設けられている。副葬品は刀子のみで、主体部上の盛土から土師器を確認した。また墓坑中央には礫敷の石材と異なる垂角礫を充填した小土坑が認められるが排水機能は期待できず、何らかの祭祀関連の施設であることが想定されている。間谷東古墳が立地する丘陵周辺には、浜井場2号墳や丁之内古墳などの木棺を伴う単独の主体部を設けた古墳が存在するが、そのなかでも棺内礫敷を持つ埋葬施設や奥才型木棺は確認できず、間谷東古墳の被葬者は、古墳が立地する丘陵周辺で上位クラスの有力な存在であったことを示唆する。

常楽寺柿木田1号墳（第71図）

常楽寺柿木田1号墳は墳丘上に主体部が3つ確認され、後円部の墳頂部に並列して配置される。第1～3主体部は組合式木棺で、各主体部に伴う副葬品は確認できなかったが、第2主体部にのみ棺内に礫敷が認められた。また第1主体部では排水溝と異なる導水機能を持つ溝SD001が墓坑に連結し、その上部に盛土と礫敷SS001が展開する構造となるため、葬送儀礼に関連する施設であった可能性が考えられた。墳頂部中央に最も規模の大きい第1主体部が配置され、第1主体部の西側には次に規模が大きい第2主体部、東側に最も小形の第3主体部が構築されている。よって、主体部の規模や配置から勘案すると、第1主体部が社会的な優位性が高く、次いで第2主体部、そして第3主体部という位置づけが想定される。

（5）古墳時代中期の埋葬施設

古墳時代中期は埋葬施設の様相が具体的に明らかになった古墳はそれほど多くはないが、1つの主体部による単独埋葬が目立つようになり（池淵 2007）、北光寺古墳（出雲市東神西町）の主体部と考えられる舟形石棺をはじめ、多様な石棺が認められる。棺内礫敷を持つ主体部は、間谷東古墳や常楽寺

柿木田1号墳と比較的近い時期に造られた可能性のある神待山1号墳や、常楽寺柿木田1号墳の近くに築かれた柿木田古墳で認められる。

そのなかで、宍道湖南岸地域において古墳時代中期前半頃に出現する組合式家形石棺を持つ軍原古墳（斐川町荘原）が注目される。詳細は不明であるが石棺の底板が存在せず、代わりに礫を敷き詰めた厚さ約27cm程度の礫敷を持つことが知られている（西尾・大國1991，大谷1994・1996a・1996b・2012）。また同地域の中期後葉頃には礫敷と想定される埋葬施設を2基確認した小丸子山古墳（出雲市斐川町）が確認されている（宍道編1992）。古墳時代中期には出雲平野における古墳の分布の中心は宍道湖南岸地域に移動するが、この地域において棺内の礫敷が連綿と継承されている様子を読み取ることができる。

4 出雲平野周辺の棺内礫敷を持つ古墳の位置づけ

（1）主体部の階層構造と棺内礫敷

これまで出雲平野周辺の埋葬施設の変遷に合わせて主体部の階層構造の様相を確認し、そのなかでの棺内礫敷の位置づけについても検討を重ねてきた。その内容を踏まえ、出雲平野周辺の様相を整理しつつ（第11表）、常楽寺柿木田1号墳を含めた棺内礫敷を持つ埋葬施設の位置づけを考察したい。

古墳時代前期中葉頃までは、主体部に伴う副葬品の優劣によって社会的な優位性を看取できる傾向が強く、それらの主体部には割竹形木棺に代表される刳拔式木棺が採用される場合が多い。その一方で、主体部の大きさや墳頂部での配置における社会的な差異は見出しがたい。

そうした状況は前期後葉から末葉に変容すると考えられ、副葬品の格差に加えて主体部の規模や配置が社会的な優位性を示す要素として付加された可能性が高い。出雲平野周辺ではこの時期に棺内礫敷を持つ埋葬施設の出現が明らかになったが、棺内礫敷は各主体部のなかでも上位クラスの埋葬施設に設けられるものの、最上位の主体部には副葬品のほかに主体部の規模や配置に社会的な優位性が表象され、棺内礫敷は必須条件ではないことが斐伊中山2号墳や山地古墳の様相から読み取ることができる。そうした状況下において、常楽寺柿木田1号墳は前期末から中期初頭頃に構築され、第1～3主体部のなかで棺内礫敷は第2主体部に採用されるが、主体部の配置や規模は第1主体部に優位性が認められる。

一方、常楽寺柿木田1号墳と概ね同時期頃に構築された間谷東古墳は、棺内礫敷を備えた奥才型木棺の埋葬施設である。主体部が単独で設営されているものの、丘陵周辺で単独の主体部を持つ他の古墳と比較すると上位に位置づけられる。この時期以降は単独の主体部を持つ古墳が多くなるが、そのなかで礫敷が採用される様相は、中期の古墳分布の中心となる宍道湖南岸地域でも認められる。

（2）排水溝の展開と変容

また、棺内への礫敷とともに注目されるのは、礫を用いた排水溝の様相である。主体部の墓坑から主体部外への排水を目的とする排水溝は、内部に礫が充填されて構築されている。古墳時代前期前葉の神原神社古墳で設けられた排水溝は、後続する浅柄Ⅱ遺跡や斐伊中山2号墳において類似した構造で構築され、前期後葉まで連綿と造られていたと考えられる。ところが、前期末頃の山地古墳では、

第 11 表 出雲平野周辺における古墳時代前半期の主要な古墳の埋葬施設一覧

時期	土 器 編 年		名 称	所 在 地	立 地	標高 (m)	墳丘形態	全 長 (m)	外表 施設	主 体 部						文 献			
	畿 内	出 雲								墳丘上配置	名 称	規 模 (m)	埋葬施設	関連施設等	副葬品				
前期初葉	布留0式	(草田6期) 大木式・ 小谷1式	土井・砂1号墳	雲南市加茂町	丘陵上	71	方墳	10×10	—	並列 (墳丘主軸直交)	第1主体部	3.4×1.8以上	組合式木棺	—	—	田原・仁木ほか編2001			
			土井・砂2号墳	雲南市加茂町	丘陵上	71	方墳	9×8	—	単独 (北裾周溝)	第2主体部	4.2×3.2以上	刳拔式木棺	底面赤彩	破鏡 (ベンガラ付着)				
			土井・砂3号墳	雲南市加茂町	丘陵上	71	方墳	9×8	—	単独 (西側周溝)	北裾周溝内 土器棺	1.5×1.3	土器棺	—	—	田原・仁木ほか編2001			
			土井・砂4号墳	雲南市加茂町	丘陵上	77	方墳	9×9	—	単独	—	2.8×2.2以上	組合式木棺	—	—	田原・仁木ほか編2001			
			土井・砂5号墳	雲南市加茂町	丘陵上	76	方墳	13×8	—	並列 (墳丘主軸直交)	第1主体部	3.6×2.8	組合式木棺	—	鉄斧・土師器	田原・仁木ほか編2001			
			土井・砂6号墳	雲南市加茂町	丘陵上	70	方墳	11×10	—	第2主体部	4.6×2.4	組合式木棺	底面赤彩	鉈・刀子?	田原・仁木ほか編2001				
			神原正面北 4号墳	雲南市加茂町	丘陵上	55	方墳	7×7	—	単独 (北西裾)	第2主体部	3.2×2.4	組合式木棺	底面赤彩	—	田原・仁木ほか編2001			
			神原正面北 5号墳	雲南市加茂町	丘陵上	57	方墳	17×12	—	単独 (墳丘主軸直交)	北西裾土器棺	0.5×0.5	土器棺	—	—	蓮岡1984 松山2002			
			第1・2 主体部?	2.0×0.7 (棺想定法量)	組合式木棺	底面赤彩	刀子	蓮岡1984 松山2002											
前期前葉	布留1式古	小谷2式	権現山古墳	出雲市大津町	丘陵上	65	方墳	19×17	—	単独	—	4.6×2.4	組合式木棺?	—	—	萩編2003			
			神原神社古墳	雲南市加茂町	段丘上	35	方墳	30×26	—	単独	—	7.5×4.6	刳竹形木棺	粘土床・敷布 石椁・底面赤彩 排水溝 土器埋納坑	鏡・大刀・鉄剣 鉄鏃・矢羽漆腺 矢柄(短鈎)、鉄斧 鉄鏃・鉄鏃、鉄鏃 鉄鏃(鉈)先 鉄鏃、鉄針・鉄棺 不明鉄器	蓮岡ほか編2002			
			松本3号墳	雲南市三刀屋町	丘陵上	90	前方後方墳	52	—	?	?	?	?	?	?	山本編1965 出考研編1991			
前期中葉	布留1式新	小谷3式古	松本1号墳	雲南市三刀屋町	丘陵上	88	前方後方墳	50	—	並列 (後門部：墳丘 主軸直交)	第1主体	5.0～6.0?	組合式木棺	粘土床 粘土椁? 底面赤彩	鏡・刀子・鉄針 小形剣形鉄製品 ガラス小玉	山本編1965 出考研編1991			
			浅柄Ⅱ古墳	出雲市知井宮町	丘陵上	62	方墳?	20×16	—	並列 (墳丘主軸直交)	第2主体	?	刳竹形木棺	粘土床 粘土椁 底面赤彩	鉄剣・鉄製品 管玉		川原編2005		
前期後葉	布留2式古	小谷3式新	浅柄Ⅱ古墳	出雲市知井宮町	丘陵上	33	円墳	12	—	単独?	第1主体	4.5×1.9	刳竹形木棺	礫床・粘土椁 排水溝	鉄剣	今岡編2009			
			西谷7号墓	出雲市大津町	丘陵上	49	方墳	23×18	—	並列 (墳丘主軸直交)	第2主体	3.8×1.5	組合式木棺	礫床・礫椁 排水溝	—		藤永編2000 坂本編2006		
			大寺1号墳	出雲市東林木町	丘陵上	39	前方後円墳	52	葺石	単独(後門部)	第1主体	6.0×3.0?	刳拔式木棺	?	?	仁木編2005			
			斐伊中山2号墳	雲南市木次町	丘陵上	110	方墳	15×12	—	周縁	第2主体	?	?	?	?	杉原・藤原編1993			
			周縁	第Ⅱ主体	4.1×1.8	組合式木棺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
			中心	第Ⅲ主体	4.2×1.5以上	組合式木棺 (奥才型木棺)	棺内礫敷 粘土椁	鉄鏃	—	—	—	—	—	—	—	—			
			中心	第Ⅳ主体	7.0×4.1	刳竹形木棺	粘土床・石椁 底面赤彩 排水溝	鏡・刀子・鉄器束	—	—	—	—	—	—	—	—			
			周縁	第Ⅴ主体	2.5×1.0	組合式木棺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
			周縁	第Ⅵ主体	4.0×1.8	組合式木棺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
			前期末葉	布留2式新	小谷4式	山地古墳	出雲市神西神町	丘陵上	28	円墳 (前方後円墳?)	24 (前方後円墳の 場合は45)	葺石	中心	第1埋葬 主体	3.2×0.6以上	組合式木棺	石枕・排水施設	鏡・筒形銅器 鉄製品・管玉	川上編1986 幡中2023
西谷21号墓	出雲市大津町	丘陵上				38	方墳	10×8	—	?	?	?	?	?	?	坂本編2006			
西谷18号墓	出雲市大津町	丘陵上				29	方墳	9×9	—	単独?	—	?	?	?	?	坂本編2006			
間谷東古墳	出雲市知井宮町	丘陵上				42	円墳	15	—	単独	—	4.8×0.8	組合式木棺 (奥才型木棺)	棺内礫敷 礫充填小土坑	刀子	泉山・曾田編2008			
常楽寺柿木田 1号墳	出雲市湖陵町	丘陵上				37	前方後円墳	35	礫敷 (第1主 体部北側 盛土上)	中心	第1主体部	6.1×2.1	組合式木棺	敷土・石枕・ 溝(葬送儀礼?) 排水溝	—	宮本編2019 幡中編2021 幡中編2023(本書)			
周縁	第2主体部	4.9×1.4				組合式木棺	敷土・棺内礫敷 排水溝	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
周縁	第3主体部	3.1×1.3				組合式木棺	敷土・排水溝	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
中期初葉	布留3式 布留4式 TG232他	大東式 (大角山式)				西谷11号墓	出雲市大津町	丘陵上	38	円墳	18	埴輪	?	?	?	?	?	?	坂本編2006
結10号墳	出雲市斐川町	丘陵上				30	円墳	10	?	単独?	—	?	?	?	?	?	?	穴道1990	
軍原古墳	出雲市斐川町	低丘陵上				10	円墳	30	?	単独?	—	?	家形石棺	棺内礫敷 棺内赤彩	甲冑(小札)・直刀 鉄鏃・刀子・銜? 貝輪・壺・勾玉 管玉・朱塊	西尾・大國1991 大谷1994・1996a・ 1996b・2012			
中期前葉	TK216	夫敷中層	雲部3号墳	出雲市湖陵町	丘陵上	45	円墳	16	?	単独?	—	?	舟形石棺	棺内造付枕 (彫込)	—	西尾・野坂2000			
			西谷16号墓	出雲市大津町	丘陵上	46	円墳	11	—	単独	—	2.8×2.3	箱式石棺	—	鉄剣・鉄鏃(鉈)先 鉄製土埴具	川上ほか編1993 花谷2011			
			荒木1号墳	出雲市東林木町	丘陵上	40	円墳	26	?	?	?	?	?	?	?	?	本庄考古学研究室1986 池淵2015		
中期中葉	ON46	夫敷中層	軍原千入塚古墳	出雲市斐川町	沖積平野	10	円墳	30	?	?	?	?	?	?	?	池田1972、池淵2015			
			北光寺古墳	出雲市東神西町	丘陵上	100	前方後円墳	64	葺石	単独(前方部)	—	?	舟形石棺	石椁?	鉄剣・鉄刀・鉄矛・ 鉄鏃・刀子・銜?	仁木編2007			
			池田古墳	出雲市今市町	丘陵上	54	方墳	15×15	—	並列?	SX01	2.3×1.1	箱式石棺	—	鏡・鉄剣・鉄斧 鉄鏃・鉄鏃(鉈)先 ガラス玉・白玉	米田編2001			
中期後葉	TK208	出雲1期古	小丸子山古墳	出雲市斐川町	丘陵裾部	13	円墳	32	?	並列?	第1・2主 体部?	?	?	棺内礫敷?	直刀?・冑? 土師器?	穴道編1992			
			白塚古墳	出雲市斐川町	丘陵裾部	3	方墳	30×30	?	?	?	?	石棺?	?	?	池田1972、仁木2014 池淵2015			
			西谷15号墓	出雲市大津町	丘陵上	37	方墳	10×10	—	単独	—	2.6×0.7	組合式木棺?	—	刀子・土師器	川上ほか編1993 花谷2011			
中期末葉	TK23 TK47	出雲1期中 出雲1期新	結11号墳	出雲市斐川町	丘陵上	30	方墳	14×11	?	単独?	—	?	?	?	蛇行鉄剣・鉄鏃 刀子	穴道1990			
			神庭岩船山古墳	出雲市斐川町	台地上	8	前方後円墳	49	埴輪	単独	—	?	舟形石棺	?	?	田中2016 内田ほか2018			

排水溝ではなく地山を掘り窪めて磔を充填した排水施設を構築しており、構造に違いが生じていることが分かる。

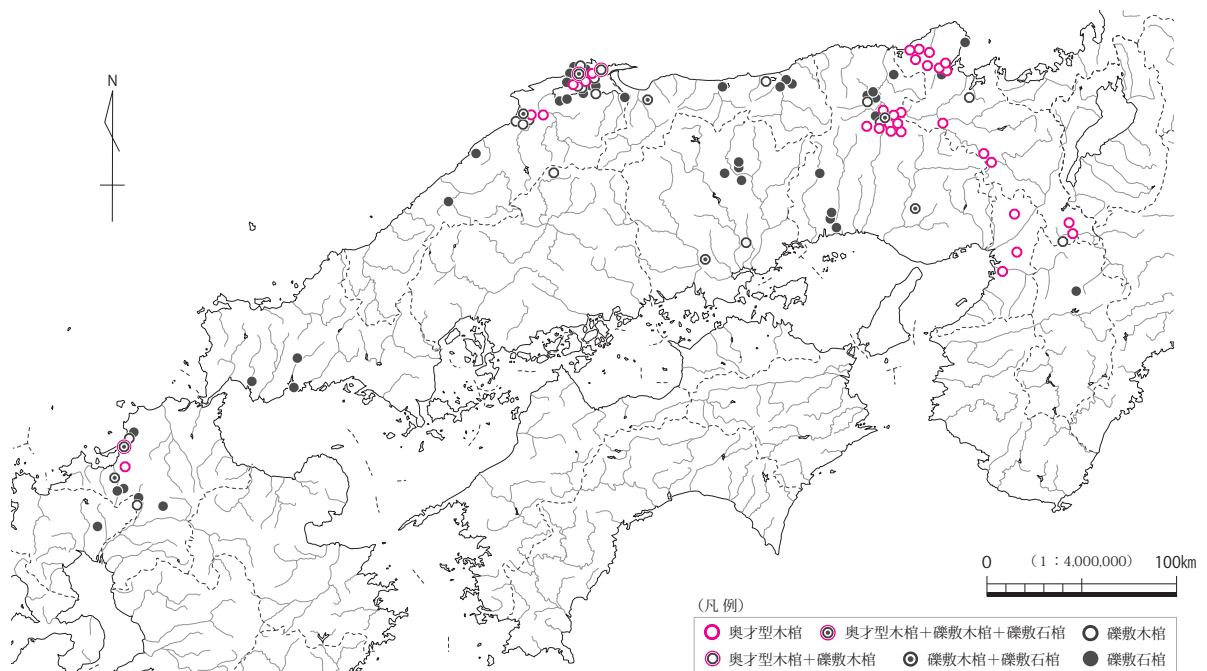
そして、その様相がさらに顕著になるのが、山地古墳に後続する前期末から中期初頭の常楽寺柿木田1号墳の第1主体部である。第1主体部に構築された溝SD001は主体部の墓坑と連結しているものの、墓坑側が低くなるほか、溝SD001上に敷設された盛土の上面に磔敷SS001が設けられており、磔と溝で構成される施設であるが排水機能を持たない。また、同時期頃の間谷東古墳では墓坑中央付近に地山を掘り窪めて磔を充填した小土坑を設けており、山地古墳の排水施設と構造が似ている一方で、排水機能は期待できない。これらは葬送儀礼や祭祀関連の施設と考えられ、前期前葉からの排水溝の系譜を継承しながらも時期を経て構造に変化が生じるなかで、施設が果たす機能自体も次第に変容していったことを具体的に示していると考えられる。

5 棺内磔敷の展開と出雲平野周辺の地域性

(1) 西日本における棺内磔敷の分布の特徴

ここで、西日本における棺内磔敷の空間分布状況を確認しておきたい(第81図)。棺内に磔敷を持つ埋葬施設は、奥才型木棺を中心に日本海沿岸地域で広く分布する。そのなかでも、主に島根半島東部や近畿地方北部、九州地方北部でまとまって確認されており、日本海沿岸の水上交通による地域間の交流や交易などを具体的に示していると考えられる(赤澤2002, 岩本2003・2010)。

なお、分布のなかで箱式石棺に伴う磔敷を持つ埋葬施設は比較的広域に展開しているが、奥才型木棺および組合式木棺における磔敷を持つ埋葬施設は、ある程度限定された地域でまとまる傾向を示している。こうした状況について、時期差や地域差を反映する可能性を含めて地域ごとにさらに詳しく検討を進める必要がある。



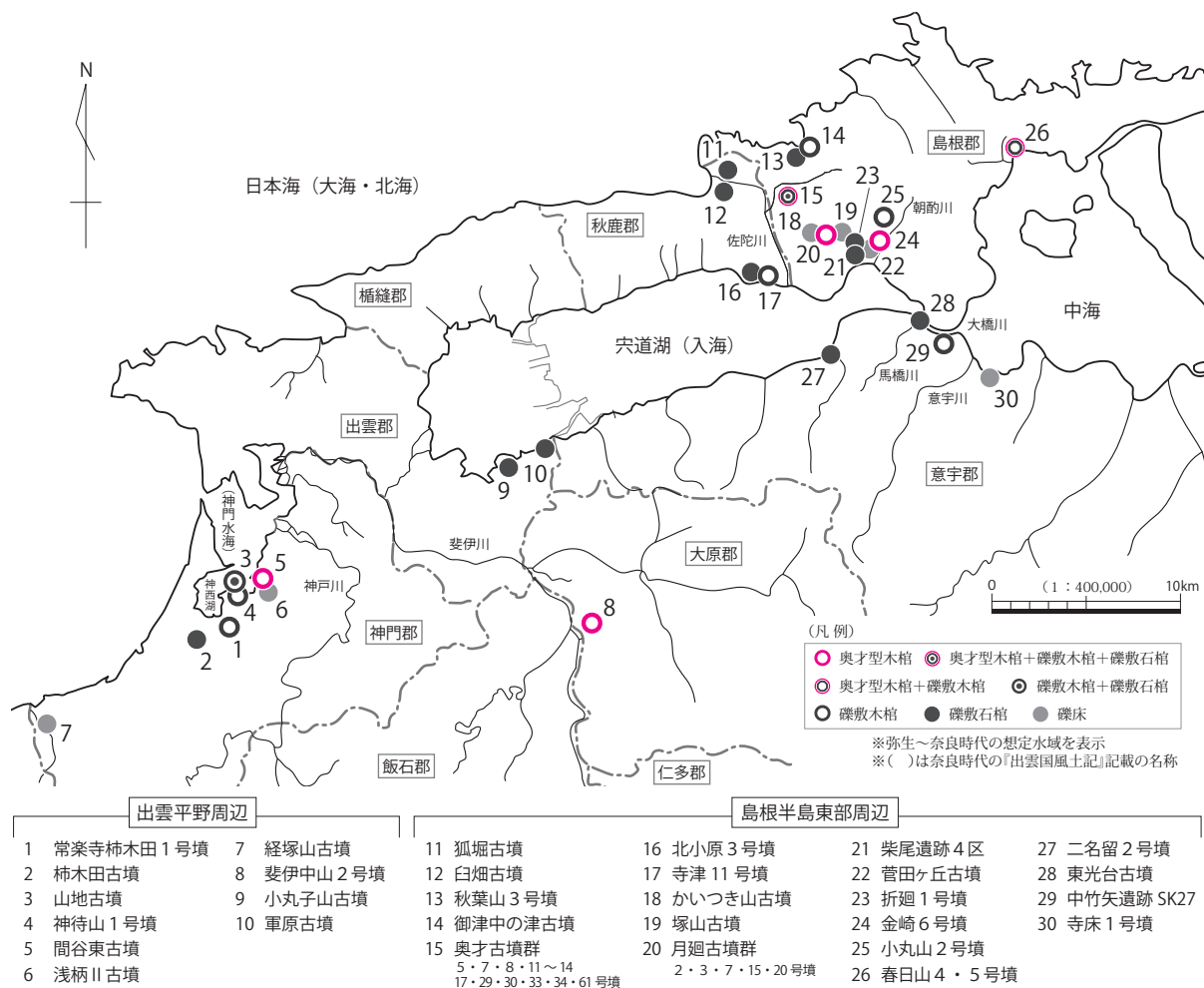
第81図 西日本における棺内磔敷の分布状況

(2) 出雲地方の東西差からみた地域性

出雲地方のなかでは、島根半島東部と神西湖南岸地域で棺内礫敷が展開する（第 82 図）。特に棺内礫敷の埋葬施設が卓越する島根半島東部では、奥才古墳群の様相が詳細に検討されており、主体部規模や墳頂部での位置関係のほか、棺内礫敷を設けた主体部は礫敷を持たない主体部よりも社会的な優位性が高い傾向にあることが示されている（岩本 2022）。

その一方で、今回検討した出雲平野周辺における棺内礫敷の様相を見ると、棺内への礫敷は墳丘上に複数の主体部が構築される場合には、ある程度上位クラスの埋葬施設に設けられるものの、最上位の主体部の埋葬構造には副葬品に加えて主体部の規模や配置が優先され、棺内礫敷は必須条件ではない状況が看取される。つまり、埋葬施設の構成要素である棺内礫敷は各地で位置づけや役割が異なっていたと考えられ、埋葬施設の地域性の一側面を示している可能性が指摘できる⁽⁶⁾。

島根半島東部は古い時期から奥才型木棺が確認され、特に奥才古墳群では棺内に礫敷を備えた箱式石棺から奥才型木棺を含む組合式木棺への変遷がスムーズに理解でき、奥才型木棺は島根半島の主体性を示すことが指摘されている（岩本 2022）。水上交通による交流や交易によって古墳時代前期後葉から末葉頃に出雲平野周辺に受容された棺内礫敷は、この地域で展開していた前期中葉までの埋葬施設の構造に組み込まれて波及するなかで、地域独自の階層構造が主体的に構築されたと考えられる。



第 82 図 出雲地方における棺内礫敷の展開

6 まとめと今後の課題

常楽寺柿木田1号墳の第2主体部で確認した棺内礫敷を中心に、埋葬施設の変遷とともに主体部の階層構造に伴う位置づけを検討してきた。そのなかで、出雲平野周辺の棺内礫敷は、古墳時代前期後葉頃に出現し、複数の主体部が構築される場合には上位クラスの埋葬施設に設置されるが、最上位の主体部には棺内礫敷は必ずしも伴わず、副葬品や主体部の規模および配置によって社会的な優位性が表象される状況が認められた。これらは埋葬施設の地域性の一端を示すとともに、当時の神西湖を舞台とした水上交通による日本海沿岸の他地域との交流や交易で受容された棺内礫敷がこの地域の埋葬施設に組み込まれ、古墳時代前期後葉から中期初頭における地域独自の階層構造のなかに包摂された可能性が考えられる。

常楽寺柿木田1号墳が造られた古墳時代前期末から中期初頭頃は、弥生時代後期後葉から継続する墳丘上の葬送儀礼の様式が時期的に変容することから、既存の思想や概念が変容して新たな秩序のもとに社会が再編される状況を読み取った（幡中 2021）。こうした動向は、排水溝の変容と展開にも見て取れる。当初の排水溝から徐々に構造が変化し、最終的には導水を伴う葬送儀礼や祭祀関連へと機能が変容する様子は、社会の再編が徐々に進行するなかで、新たな価値づけや意味合いの変化が生じたことを具体的に反映する可能性があり、古墳時代中期の集落で水辺の祭祀が盛行する状況（池淵 2008）を含めて当時の葬送儀礼や祭祀の様相を総合的に検討していく必要がある。このような社会の転換期が、地の利を活かした水上交通による遠隔地との交流・交易のなかで棺内礫敷を主体的に受容し、地域独自の階層構造として展開することを促したと考えられる。

これらを総合的に捉えると、常楽寺柿木田1号墳の埋葬施設や葬送儀礼は、弥生時代の伝統的な系譜を残す古墳時代前期から新たな秩序のもとに社会が再編される古墳時代中期への過渡的な様相を具体的に反映すると考えられる。そのため、今後は棺内礫敷の構造や地域性を様々な視点から検討し、常楽寺柿木田1号墳が築かれた古墳時代前半期の様相をさらに明らかにすることが求められる。

（幡中光輔）

註

- （1）山陰自動車道建設に伴い浅柄Ⅱ遺跡の発掘調査が行われたなかで古墳が確認されており、その調査で見つかった古墳を浅柄Ⅱ古墳としている（川原編 2005）。
- （2）木棺に伴う「棺内礫敷」と埋葬施設全体の下部構造である「礫床」の差異については、岩本崇氏からご教示をいただいた。
- （3）土坑の主軸方向は礫敷と揃っており、これが主体部の墓坑であるとすれば、墳頂部に複数の主体部が設けられていた可能性が高い。
- （4）浅柄北古墳の近くには古墳時代後期の横穴墓が8基設けられ、それに伴う後背墳丘も2基認められる。また浅柄北古墳は墳丘上に須恵器などの横穴墓に伴うとみられる土器群が確認されており、後背墳丘として古墳時代後期にも利用されたと考えられる（今岡編 2009）。
- （5）浅柄北古墳から比較的近い位置に立地する浅柄古墳は、板石の組み合わせで箱式石棺が造られており、浅柄

北古墳も同様に板石で構成された箱式石棺が構築されていた可能性が考えられる。

- (6) なお近畿地方北部では、棺内礫敷を持つ組合式木棺は比較的幅広い階層で受容されながらも相対的には高いランクに位置づけられ(岩本 2010)、奥才型木棺は首長墳に積極的に採用されたと考えられている(岩本 2022)。

参考文献

- 赤澤秀則 2002 「小結」『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 53～60 頁
- 池田満雄 1972 「古墳とその時代」『斐川町史』斐川町教育委員会 92～117 頁
- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 117～143 頁
- 池淵俊一 2008 「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 島根県教育委員会 294～313 頁
- 池淵俊一 2015 「出雲の古墳編年について」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第14集 島根県古代文化センター 19～32 頁
- 出雲考古学研究会編 1991 『松本古墳群—斐伊川流域の前期古墳をめぐって—』古代の出雲を考える7
- 出雲市教育委員会編 1993 『出雲市遺跡地図』
- 今岡一三編 2009 『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 島根県教育委員会
- 岩本 崇 2003 「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第3号 大手前大学史学研究所 1～20 頁
- 岩本 崇 2010 「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳 総括編』一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ・兵庫県文化財調査報告第383冊 兵庫県教育委員会 507～518 頁
- 岩本 崇 2018 「古墳出土土器をめぐって 副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 137～148 頁
- 岩本 崇 2022 「いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係」『社会文化論集 島根大学法文学部紀要』第18号 島根大学法文学部社会文化学科 71～90 頁
- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2018 「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第35集 島根考古学会 21～38 頁
- 大谷晃二 1994 「斐川町軍原古墳について(上)」『八雲立つ風土記の丘』No.127 島根県立八雲立つ風土記の丘 7～8 頁
- 大谷晃二 1996a 「斐川町軍原古墳について(中)」『八雲立つ風土記の丘』No.136 島根県立八雲立つ風土記の丘 4～7 頁
- 大谷晃二 1996b 「斐川町軍原古墳について(下)」『八雲立つ風土記の丘』No.137 島根県立八雲立つ風土記の丘 2～5 頁
- 大谷晃二 2012 「出雲市斐川町軍原古墳について(続)」『八雲立つ風土記の丘』No.209 島根県立八雲立つ風土

記の丘 2～5頁

大谷從二・池田満雄 1972「出雲・浅柄古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第IV集 島根県教育委員会 61～63頁

景山真二・曾田辰雄編 2008『玉泉寺裏遺跡・浜井場4号墳・間谷東古墳』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 島根県教育委員会

川上 稔編 1981『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川上 稔編 1986『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川上 稔・松山智弘・湯村 功・米田美江子編 1993『簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川原和人 1992「出雲市・神待山2号墳出土の備前壺」『松江考古』第8号 松江考古学談話会 121～123頁

川原和人編 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書2 島根県教育委員会

岸 道三編 2005『浜井場古墳群発掘調査報告書』出雲市教育委員会

坂本豊治編 2006『西谷墳墓群―平成14年～16年度発掘調査報告書―』出雲市教育委員会

穴道年弘 1990「島根県東部における古墳時代前半期の群集小墳について」『島根考古学会誌』第7集 島根考古学会 95～100頁

穴道年弘編 1992『島根県斐川町 遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告10 斐川町教育委員会

杉原清一・藤原友子編 1993『斐伊中山古墳群―西支群―』木次町教育委員会

第13回播磨考古学研究集会実行委員会編 2012『前期古墳からみた播磨―徹底討論 前期古墳編年と社会動向― 第13回播磨考古学研究集会資料集』

田中 大 2016「出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 19～24頁

田原淳史・仁木 聡・和田康宏編 2001『湯の奥遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会

中国四国前方後円墳研究会編 2014『前期古墳編年を再考する―広域編年再構築の試み― 発表要旨集・資料集』中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会

中国四国前方後円墳研究会編 2019『中期古墳研究の現状と課題Ⅲ～埋葬施設の形式・構築方法・儀礼の地域的展開と被葬者像～ 発表要旨集・資料集成』中国四国前方後円墳研究会第22回研究集会

仁木 聡編 2005『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書29 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

仁木 聡編 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書36 島根県教育庁文化財課古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

仁木 聡 2014「出雲西部の豪族たち」『倭の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録 島根県立古代出雲歴史博物館 160～162頁

- 西尾克己・大國晴雄 1991『出雲平野の古墳』出雲市民文庫9 出雲市教育委員会
- 西尾克己・野坂俊之 2000「古墳時代の遺跡」『湖陵町誌』湖陵町 219～230 頁
- 野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会
- 萩 雅人編 2003『長廻遺跡 (Vol.2)・権現山古墳』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ
島根県教育委員会
- 蓮岡法暲 1984「加茂町の古代 (古代1)」『加茂町誌』加茂町 39～62 頁
- 蓮岡法暲・勝部 昭・松本岩雄・宮沢明久・西尾克己・山崎 修編 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 幡中光輔 2021「出雲平野周辺の墳丘上における葬送儀礼の場とその変遷」『常楽寺柿木田古墳群―常楽寺柿木田
1号墳の調査―』一般国道9号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財
報告 46 出雲市教育委員会 89～106 頁
- 幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群―常楽寺柿木田1号墳の調査―』一般国道9号 (出雲湖陵道路) 改築工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会
- 幡中光輔 2023「山地古墳の再検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第11集 出雲弥生の森博物館 1～14
頁
- 花谷 浩 2011「西谷15・16号墳について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館
29～43 頁
- 藤永照隆編 2000『西谷墳墓群―平成10年度発掘調査報告書―』出雲市教育委員会
- 本庄考古学研究室 1986「出雲の主要古墳一覧」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生
喜寿記念論集刊行会 639～657 頁
- 松江市史編集委員会編 2012『松江市史 史料編2 考古資料』松江市
- 松山智弘 2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 243～249 頁
- 松山智弘 2018「地域の画期と社会変動 山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 311～322 頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群―弥生時代集落の調査―』一般国道9号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会
- 山本 清編 1965『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- 米田美江子編 2001『池田古墳』一畑バス営業所用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委
員会

挿図出典

第72図・第11表：池淵 2015，岩本 2018，松山 2018 をもとに編年を作成 第73図：川原編 2005 から引
用して加筆 第74図：川上編 1986，幡中 2023 から引用して加筆 第75図：景山・曾田編 2008 から引用
して加筆 第76図：川原 1992 を再トレースして作成 第77図：田原・仁木ほか編 2001 から引用して加筆
第78図：蓮岡ほか編 2002 から引用して加筆 第79図：山本編 1965，出雲考古学研究会編 1991 から引用
して加筆 第80図：杉原・藤原編 1993 から引用して加筆 第81・82図：赤澤 2002，第13回播磨考古学
研究集会実行委員会編 2012，松江市史編集委員会編 2012，中国四国前方後円墳研究会編 2014・2019，岩本
2022 をもとに作成